

THE COMMENTARY

スタンフォード大学における医療系起業家 精神育成講座

池野 文昭

Fumiaki Ikeno

Program Director (U.S.) Japan Biodesign, Stanford Biodesign, Stanford University

Researcher, Division of Cardiology, Stanford University

Co-Director of Asian Pacific, SPARK Global

Executive Director, Japan Biodesign

✉ fikeno@stanford.edu

はじめに

現在、日本をはじめ世界各国の大学において、起業家精神を育成する講座が盛んに設立されている。医学部においてもそれは例外ではない。一昔前の日本の医学部では考えられないことである。筆者は、2001年からシリコンバレーの中心に位置するスタンフォード大学に留学し、すでに19年が経とうとしている。1939年、そのスタンフォード大学で工学部の学生2人が教授のアドバイスのもと、名もない小さな電気関連の会社を大学近くのガレージで創業した。2人の学生の名をとったHewlett・Packard社というその会社はその後、世界第2位のコンピュータ会社に成長しシリコンバレーの基礎を築き上げた。このようにスタンフォード大学は起業家育成のメッカであることは、今現在も変わりない。医学部においても、2001年から医療機器に特化した起業家育成講座であるStanford Biodesign Programが、2006年からは創薬・バイオ系における起業家育成講座であるStanford SPARK Programが設立された。これらを見ると、ここスタンフォード大学においても、医療系の起業家育成講座の歴史は決して古くなく、21世紀に入ってからである。今回、この2つのプログラムを簡単に紹介させていただく。

医療系イノベーションの起こし方

起業家育成で有名なスタンフォード大学ではあるが、あくまでも大学の本分は教育と研究であり、ことその研究のレベルの高さから多くのノーベル賞受賞者を輩出してきた。ただし決定的に違うところは、様々な研究成果をできるだけ社会に還元しようという精神が研究者・大学に宿っていることである。「研究成果を社会に役立てる」、その一つの手段がその研究成果である“シーズ”を社会に応用するために社会が要求していること、つまり“ニーズ”であり、特に解決されていないニーズにマッチさせることが必要になってくるのである。

すなわち“シーズ”が“ニーズ”を見つけにいくという構図である。“シーズ”は、技術にも置き換えられるので、所謂“Technology Push”によるイノベーションの創出である。しかし、それには陥りやすいピットホールが存在する。それは、研究者が発見・発明したシーズ(技術)は、すべてのニーズを満たすわけではなく、当然であるがそのシーズ(技術)と相性がよい最もベストマッチしたニーズとの組み合わせが真のイノベーションを生むが、実際にはその組み合わせが上手くいっていないことが多く、失敗することになる。

もちろんアイデアが素晴らしくとも、事業を興し、それを成功させるにはその過程において克服していかなければならない多くのリスクがあるが、そもそもその最上流であるそのアイデア、つまり製